

ミュージアム・レター

Gakushuin University Museum of History Museum Letter No.18

発行日 ● 平成24年(2012)2月16日

もくじ

- ごあいさつ……………1
- 史料館の蔵書—「文庫」を中心に—……………2・3
- 史料館の文庫……………4
- 史料館の文庫を利用するには……………4

■次回史料館展覧会のお知らせ

平成24年度 学習院大学史料館 常設展
「大正の記憶—絵葉書の時代」展
 2012年4月5日(木)～6月9日(土)
 学習院大学史料館展示室(北2号館1階) 入場無料
 平日 12時～17時 土曜日 10時～17時
 休館日 日・祝、5/15(火)
 ※4/8(日)入学式、4/15(日)第26回「オール学習院の集い」は閉館(10時～17時)

ごあいさつ

学習院大学史料館は、研究に加え、展示などの教育普及活動を行う一方、レファレンスライブラリーとしての図書館機能をあわせ持っております。今回は、それに関する特集をお送りします。

研究者や作家は本を大量に持つ蔵書家であるのが普通です。彼らにとって、書物は仕事に欠かせないものですから、経済的事情が許す限りせっせと買入れるわけですが、人生のある時期に達すると、蔵書の多さに悩むこととなります。大学教員の場合、定年が間近になると、退職後に研究室の本が自宅に収まるのかどうか、という問題が生じます。この時点で、教え子たちに譲る、古書店に売るなどして、自ら蔵書整理をする人もありますが、最大の問題は、没後の蔵書の行方でしょう。自分が関心を寄せてきたあれこれのテーマに沿って集めた書物群にはそれなりの筋道がありますから、分散させたくない、というのが持ち主の希望でしょう。しかし、それが実現するのは稀有な場合と思われます。学習院大学史料館の六つの「文庫」はそうした稀有な例といえるでしょう。

「児玉文庫」をはじめとする史料館の「文庫」は、個人が研究的関心をもって集めた書物をまとめて譲り受けたものです(詳細は次ページ以降)。同様の問題意識をもつ人にとっては、先達が集めたこれらの文献の中に、自分の研究に大きな示唆を与えてくれるものが含まれていることでしょう。さらに、蔵書を手がかりとして、それを集めた人の思想を研究するという道もあります。いずれにしても、肝心なのは、これらの書物が大切に継承されるだけでなく、常に利用可能であるということです。「読まれない本」というのは、本としての存在を全うしているとはいえません。

そこに、蔵書家が自ら集めた本の多さに悩む契機の一つがあります。ふと齢を意識して、残りの持ち時間では集めた本を読みきれないと気づくと、本に対して、済まない、という気になるらしい—という他人事のようなのですが、これは最近の私自身の悩みでもあります。私が読めなくとも誰かに読んでもらえることを念じて、「高橋文庫」を残しましょうか？

それはさておき、「文庫」の形成と寄贈に関わられた方々に改めて感謝申し上げ、貴重な書物が時代を超えて読み継がれていく場として、史料館も志を新たにしたいと思います。

(館長 高橋裕子)



明治42年(1909)に建てられた学習院の図書館(現史料館) 閲覧室
 史料館には、今もあかりとりの天窓や窓などに当時の面影がのこる

【大札奉献学習院写真】大正4年(1915)

史料館の蔵書

—「文庫」を中心に—

学問・研究を志す者にとって書物はどれほど大切なものであろうか。個人の蔵書は一般にその人の趣味や志向、考え方の根本を映し出すといえるが、こと研究者については、その研究への取り組み姿勢や考え方を表すものといえよう。

学習院大学史料館の総蔵書数は、現在、図書、雑誌などあわせて約5万冊あり、そのうち6つの文庫「児玉文庫」、「小川文庫」、「桜鞍会文庫」、「永山文庫」、「学習院考古学文庫」、「橋口文庫」(詳細は4ページ参照)が約2万3千冊を占める。「文庫」とは個人が収集した図書資料をまとめて譲り受け、1つの群として整理し保管しているものであり、収集した人物の関心領域を語ってくれる興味深い学術資料である。

今号では、本館に収蔵されている文庫の中から、特に当館とのゆかりが深い児玉幸多氏(1909~2007)の蔵書であった「児玉文庫」と、このたび大久保家のご厚意により新たに加わることになった大久保利謙氏(1900~95)の蔵書「大久保文庫」を中心に紹介したい。

児玉文庫

学習院大学名誉教授、元学長、児玉幸多氏の蔵書。書籍、目録、報告書、戦前の雑誌類など多岐にわたっている。およそ2万冊の蔵書は、約1万6千冊の書籍と2千冊を超える逐次刊行物からなる。この他に未整理の抜刷(論文の抜粋)や雑誌類が約2千冊ある。氏は平成19年(2007)7月に97歳で亡くなられたが、その生前に、蔵書のすべてを史料館へ寄贈すると決めて下さっていた。

同氏は明治42年(1909)長野県に生まれ、東京帝国大学国史学科卒業後、第七高等学校教授を経て、昭和13年(1938)学習院教授に就任。同45年(1970)に学習院女子短期大学長、同48年(1973)には学習院大学長を歴任。日本近世農村史、交通史の分野の第一人者である。

そもそも学習院大学史料館は、昭和39年(1964)に文学部史学科に発足した史料室であったが、同50年(1975)に大学附置研究機関として独立、その時尽力されたのが児玉氏であった。また第二次大戦中、当時図書館として使用されていた現在の史料館建物に、夜間空襲が飛び火し、それを消し止めたというエピソードもある。こうした経緯から、児玉氏は「史料館の父」と称される存在であり、蔵書のもっともふさわしい寄贈先として当館を選んでいただけたこととなった。

児玉氏は戦前から地方史研究に取り組み、戦後は史料保存・利用運動に力を入れた。地方史研究者の育成や自治体史の編纂にも先導的役割を担い、その関係から当館に寄贈され

た蔵書のうち地方史関係図書は8千冊以上にのぼる。逐次刊行物の中には、氏が発足に関わった地方史研究協議会の会報『地方史研究』が創刊号から、史学会発行の『史学雑誌』も明治43年(1910)以降に発行された号が揃っている。歴史研究の基本文献が網羅されているだけでなく、『アララギ』や『中央公論』といった文学関係の雑誌も多く含まれている。さらに自身の著作である『近世農民生活史』(1957年 吉川弘文館)、『近世交通史の研究』(1986年 筑摩書房)をはじめ、執筆や編纂に携わった中学・高校歴史教科書やくずし字解読には欠かせないロングセラー『くずし字用例辞典』(1980年 近藤出版社)などが含まれる。歴史学に興味を持つ多くの学生や研究者の様々な問題、関心に応えてくれる充実した文庫である。



『地方史研究』創刊号~3号 (1951年3月~11月)



児玉幸多氏 自宅の応接間兼書斎にて 昭和60年(1985)12月8日



地下書庫に並ぶ児玉文庫

『史学雑誌』

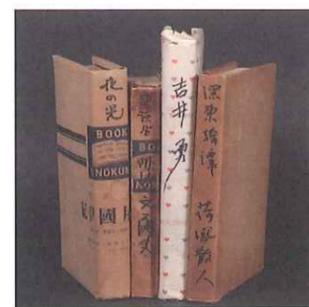
大久保文庫

大久保利謙氏は明治33年(1900)東京生まれ。祖父は明治の元勲、大久保利通。学習院初等科から中・高等科を経て、大正11年(1922)京都帝国大学経済学部入学。3年在籍した後、大正15年(1926)東京帝国大学国史学科入学。卒業後『東京帝国大学五十年史』、『貴族院五十年史』などの編纂事業に携わった。昭和24年(1949)、国立国会図書館憲政資料調査を委嘱され、憲政関係のみにとどまらず幕末以降の経済・外交史料などの収集に奔走し、これが今日の国立国会図書館憲政資料室として結実した。昭和28年(1953)名古屋大学教授、同34年(1959)立教大学教授を歴任。また、学習院大学や東京大学でも非常勤講師として教鞭を執った。

研究論考は、政治史・文化史等と広範にわたっているが、特に明治憲法成立史や華族制度史の体系的研究にすぐれた業績を残した。

同氏は生前、父利武氏(米・独に留学後、内務省官僚として活躍)の洋書コレクションや留学時代の受講ノートなどを含め、蔵書2万冊あまりを立教大学に寄贈。現在これらは「大久保利謙文庫」として公開され、明治維新より大正に至る貴重な日本近代史資料として評価されている。このたび史料館に寄贈された蔵書は、氏が亡くなる直前まで手元に残っていた蔵書群であり、長年の研究生活における収蔵図書の中でも選りすぐりのものといえる。

内訳は書籍が約380冊、逐次刊行物が約400冊。自筆原稿も数点含まれている。一点一点の書物をひもとくと、自筆のサインや購入履歴、朱書きの傍線や鉛筆での書きこみ、蔵書印の押捺などが随所に見られる。また、文献の書評や関連記事の切り抜き、出版広告や付箋などといった付属資料のほか、デパートの包装紙を使った手製のブックカバーなども遺されている。



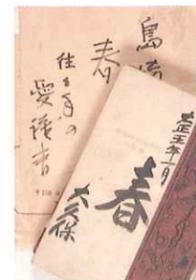
大久保氏自身で記されたタイトルと手製のブックカバー



『日本近代史事始め』亡くなる3日前に校了となった最後の著書



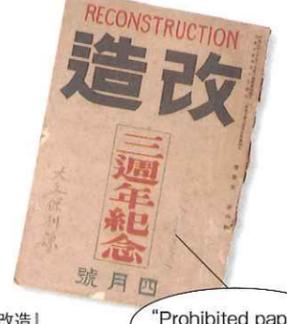
『白樺』創刊号(1910年4月)から大正期にかけてのもの



『春』と茶封筒 16歳の時の蔵書



『みづのたはこと』昭和60年(1985)11月13日入手 カエダの葉がはさまれていた



『改造』(1921年4月1日号) "Prohibited paper"と書きこみがある

大久保氏最後の著書『日本近代史事始め』(1996年 岩波書店)は、原資料を追求した先駆的研究に加え、若き日に接した研究者との出会いや、多感な頃に読んだ本、古本屋との付き合いなど興味深い回想が綴られている。例えば『白樺』を読みふける「文学青年」だった氏が、中等科時代初めて買った文学書について、「…神田に東京堂という本屋があって、そこにおそるおそる行った。たしか新潮社から出ていた、きれいな表紙の明治文学の選集があって、そのなかから島崎藤村の『春』を買いました…」と語っている。この時手に入れた『春』は「往年の愛読書」と手書きした茶封筒に入っていた。想いの深い一冊であったに違いない。

河上肇『近世経済思想史論』(1920年 岩波書店)は、当時京都帝国大学教授であった氏が、大正8年(1919)におこなった6日間にわたる講演をまとめたもの。大久保氏が高等科2年の時に実際にこの講演に参加していたことや、同著愛読の様子が裏見返しに書きこまれている。後に京都帝国大学に進学し、経済学部で河上氏の講義を受けるきっかけとなった一冊かもしれない。晩年93歳の時に購入した徳富蘆花『みづのたはこと』(1913年 新橋堂書店)には、「…はからずキヌタ文庫にて掘り出す。蓋し逸品なり。謙」とある。こうした細かい書きこみや付属資料からは、大久保史学の厚みとともに氏の人となりや素顔にも触れることができる。



大久保利謙氏 立教大学大久保文庫の書架にて 平成4年(1992)10月

個人の蔵書がまとまったかたちで保存され、旧蔵者と関係の深い当館に収蔵されていることの意義は大きい。今となっては手に入らない貴重な書籍も多く含まれている。戦禍を免れ、旧蔵者の没後も蔵書を引き継ぎ、守られたご家族や関係者のご意思を忘れることなく、大学の財産として大切に保存し、各方面の研究のために広く活用されることを願っている。

(図書担当 富田ゆり)

見玉文庫〈約20,000冊〉

請求記号 Kod

見玉幸多氏 (1909～2007)

学習院大学名誉教授、元学長。東京帝国大学国史学科卒業後、第七高等学校を経て学習院教授に就任。日本近世農村史、交通史の分野の第一人者。主な著書に『近世農民生活史』、『近世宿駅制度の研究』など。

書籍、目録、報告書、戦前の雑誌類など多岐にわたるコレクション。約16,000冊の書籍のうち地方史関係図書は8,000冊以上に上る。この他に未整理の抜刷や雑誌類、パンフレット類が数千冊ある。執筆・監修に携わった著作物も300冊近く含まれる。

大久保文庫〈約800冊〉

請求記号 Oku

大久保利謙氏 (1900～95)

元名古屋大学教授、立教大学教授。学習院高等科から京都帝国大学を経て東京帝国大学へ。日本近代史学に対する多大な貢献により、'93年朝日賞受賞。祖父は大久保利通(1830～78)。

立教大学の「大久保利謙文庫」は明治維新より大正に至る貴重な日本近代史資料であるが、当館の蔵書は、氏が亡くなる直前まで手元に残していたものである。書きこみや付箋なども多数見られる。これら書きこみなどを同文庫の特徴として、氏が使ったままの状態を残すべく図書の装備を施し、収蔵している。

学習院 考古学文庫〈約400冊〉

請求記号 Gkk

岡田茂弘氏 (1934～)

学習院高等科史学部OB、現大学史学部顧問。国立歴史民俗博物館名誉教授。

学習院には考古学を専攻する学科はないが、史学会(1927年設立)、中・高等科史学部、大学史学部、考古学研究会がつくられ、考古学を盛んにおこなってきた。それに伴う発掘調査報告書、機関誌、図面類などの考古学関係資料約300冊。岡田氏よりの寄贈書が6割を占める。

内藤政恒氏 (1907～70)

学習院中・高等科を経て東北帝国大学に入学後、古瓦や古硯研究をおこなう。昭和32年(1957)歴史考古学会を設立。

古瓦や古硯をはじめとする内藤氏の研究に関する書籍や論文など約100冊。瓦や彫刻の貴重な拓本類などの付属資料もある。

(蔵書数は2012年1月現在)

木立に囲まれた白い洒落た洋館が史料館です。国登録有形文化財である明治42年(1909)の建築(設計:文部省技師・久留正道)は、外観、内装ともに見どころ満載。明治期から続く学習院の伝統と歴史に触れることのできる空間です。学内外を問わずどなたでも利用できます。図書は館内閲覧のみです。

〈閲覧時間〉月～金 9時30分～17時
(昼休み 11時30分～12時30分)
〈休止日〉土・日曜、祝日、開学記念日(5/15)、
開院記念日(10/17)、博物館実習期間ほか
臨時休館日

詳細は、大学ホームページから確認できます。

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/>

史料館の蔵書は、オンライン所蔵目録(GLIM/OPAC)から検索できます。一部検索できない蔵書もあります。

<http://glim-ir.glim.gakushuin.ac.jp/opac/>

古文書など史料閲覧については予約が必要となります。



史料館



閲覧室

永山文庫〈約1,200冊〉

請求記号 Nag

永山武臣氏 (1925～2006)

松竹株式会社元社長。女子学習院幼稚園から高等科を経て、京都大学卒業。その後松竹株式会社に入社。歌舞伎の発展に尽くし、歌舞伎興行を国内外で定着させるなど演劇界に大きく貢献した。

『歌舞伎年代記』、『松竹社史』など演劇史に関する書物をはじめ、歌舞伎の筋書、献呈版『六代目中村歌右衛門』や谷崎潤一郎の限定版『二月堂の夕』などの稀少本も含まれる。日本近代文学の基礎をなした作家の全集や学習院時代の一級上で松竹入社後も親しく交流のあった三島由紀夫の著書も含まれている。



小川文庫〈約500冊〉

請求記号 Oga

小川恭一氏 (1925～2007)

大名・旗本・御家人を中心とする徳川幕府制度の研究者。江戸文化・風俗の研究者三田村鳶魚(1870～1952)に師事。主な著書に『江戸幕府旗本人名事典』など。

小川氏自身が収集した歴史、美術、茶道関係の蔵書のほか、三田村鳶魚から譲り受けた蔵書など。『江戸百話』、『大名生活の秘話』をはじめ、大正～昭和20年にかけて鳶魚が著した初版本や鳶魚の蔵書印が捺された書物も含まれる。(現在一部整理中)



橋口文庫〈約80冊〉

請求記号 Has

橋口稔氏 (1930～)

東京大学名誉教授、専門は20世紀英国文学。学習院中・高等科を通じて演劇部に所属。日本の古典文学、伝統芸能にも造詣が深い。祖父は児童文学の礎を築いた巖谷小波(1870～1933)。

新劇、歌舞伎など演劇や日本の伝統芸能に関する書物のほか、台本や公演パンフレットからなる。この文庫には、チケットなどの付属資料も含まれる。この他橋口氏の絵葉書コレクション(約500点)は、次回展覧会(→P.1)で公開予定。

桜鞍会文庫〈約330冊〉

請求記号 Uma

桜鞍会 (1942～)

馬術部OB組織。学習院中・高等科では馬術が正課の授業として重んじられ、大正11年(1922)には馬術部が誕生した。

馬術関係の書物や雑誌などには、明治・大正期の洋書もある。そのほか『打毬競技規程』、『打毬のしおり』など日本古来の馬術競技である打毬に関する資料や記録フィルムがある。



ミュージアム・レター第18号

2012年2月16日発行

〒171-8588

東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(3986)0221

内線 6569

FAX 03(5992)9219

Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua/>